韓国出土唐三彩の調査

はじめに　都城発掘調査部では、中国河南省文物考古研究所と、河南省鞏義市に所在する唐三彩窯跡およびその産品に関する共同研究を継続的に実施しており、その実態があきらかになりつつある。また、2011年度からは大韓民国国立文化財研究所との共同研究の一環として、「古代日本の土器生産における韓半島の影響に関する研究」を開始し、韓半島出土唐三彩や新羅産緑釉陶器についての研究を進めている。これらの研究は、古代東アジアにおける唐三彩の生産・流通および鉛釉陶器製作技術の伝播過程の解明を目的としたものである。今回は韓国出土唐三彩の様相の把握を目的として、2012年３月19日から23日にかけて、国立慶州文化財研究所、東国大学校慶州キャンパス博物館、中央文化財研究院、国立中央博物館において調査を実施した。その概要を報告する。

韓国出土唐三彩の概要（表13）　申浚氏の集成（申2011）および筆者らが集成したところ、現在韓国で出土している唐三彩は10遺跡、19点ある（同一個体を含む）。この他唐三彩ではないが、素焼きの鴨形杯が慶州九黄洞苑池遺跡より出土している。唐三彩の大半は新羅王京が所在する慶州周辺からの出土であり、出土遺跡の性格は宮殿・王京内宅地・寺院・火葬墓などである。韓国では日本と比べ唐三彩の出土量が少なく、出土遺跡や器種構成の検討は今後の資料の蓄積を見守る必要がある。

新羅王京出土陶枕は、素弁単弁四弁花文を押印する同一個体の２点と穿孔のある側板１点で、鞏義窯産製品の可能性が高い。同様の花文は奈良市大安寺出土品と洛陽東崗唐墓に類例がある（神野2010）。精良な白色瓷胎で器壁が薄く、隣接する花弁の色を交互に塗り分け、花文間に白釉を点描するなど、洗練された作りである。

また、今回の調査では実見できなかったが、月城垓子出土猿頭塤や朝陽洞出土三足炉も類品が鞏義窯から出土しており、鞏義窯産製品の可能性が高い。

その一方で、あきらかに鞏義窯産製品とは異なるものも見られた。新羅王京出土鉢片は器壁に厚みがあり、胎土は赤みを帯びたやや粗い瓷胎で、化粧土は施さない。また、芬皇寺出土三足炉の胎土は黒色粒子を含む粗い瓷胎で褐色を呈する。内面は黄褐色を呈し、光沢をもつ。化粧土は施さない。これらの特徴は鞏義窯出土品に共通して見られる特徴とは異なる。

まとめ　今回の韓国出土唐三彩の調査では、鞏義窯産製品をはじめ、その他の窯産とみられる製品など多様な産地の唐三彩が韓半島へ持ち込まれていることをあきらかにすることができた。今後、中国において唐三彩を焼成した各窯出土製品の観察を進め、それらの周辺諸国への流通について検討を進めていきたい。

また、新羅産緑釉陶器をはじめ緑釉、褐釉を施した製品も実見することができた。これらは印花文などの施文や器形からみて、新羅の陶質土器製作技術を基礎として製作された鉛釉陶器である。日本、新羅両国では、唐三彩製品が持ち込まれ、また国内での鉛釉陶器製作をおこなう点は同様であるが、そのあり方には違いがみられる。鉛釉陶器製作技術の伝播・受容過程という点では、新羅産緑釉陶器と日本の飛鳥池遺跡出土の鉛釉陶器や奈良三彩との比較研究も必要となる。今後もこれらの視点から総合的な検討を進めていきたい。　（小田裕樹）

参考文献

神野恵「大安寺陶枕再考」『河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概報』奈良文化財研究所、2010。
金英媛「統一新羅時代鉛釉의発達과磁器의出現」『美術資料』62、1999。
申浚「韓国出土唐三彩」『中国鞏義窯』北京芸術博物館、2011。

表13　韓国出土の唐三彩

地域	出土遺跡	器種名	文　献
慶州	月城垓子遺跡	唐三彩塤	文化財研究所・慶州古蹟発掘調査団『月城垓字』1990。
慶州	新羅王京S1E1地区	唐三彩枕・蓋・小壺・鉢・壺蓋	国立慶州文化財研究所『新羅王京』2001。
慶州	皇南洞376遺跡	唐三彩小形鉢	東国大慶州キャンパス博物館『慶州皇南洞376統一新羅時代遺跡』2002。
慶州	東川洞681-1遺跡	唐三彩片	慶州大学校博物館『慶州東川洞古代都市遺跡』2009。
慶州	皇龍寺跡	唐三彩枕	国立大邱博物館『中国陶磁器』2004。
慶州	芬皇寺跡	唐三彩三足炉	国立慶州文化財研究所『芬皇寺Ⅰ』2005。
慶州	味呑寺跡	唐三彩枕・壺・不明片	国立慶州博物館『味呑寺址』2007。
慶州	朝陽洞遺跡	唐三彩三足炉	小山冨士夫「慶州出土の唐三彩鍑」『東洋陶磁』１、1974。
慶州	蘿井遺跡	唐三彩三足炉・獣脚	中央文化財研究院『慶州蘿井』2008。
保寧	聖住寺	唐三彩片	保寧市・忠南大学校博物館『聖住寺』1998。